

## 豊かな森を守ろう！取り戻そう！

## 目 次

- \* あいち森と緑づくり事業を終えて・・・ P 1 - 2
- \* 平成 21 年秋の観察会によせて・・・ P 2 - 3
- \* 百年の森づくり・・・ P 4 - 7
- \* 奇跡の干潟・六条潟、今、なぜ奥山トラストか？・・・ P 8
- \* 葉っぱの不思議・・・ P 9
- \* 活動記録、ナショナルトラストについて、お知らせ・・・ P 10

## あいち森と緑づくり事業を終えて

NPO法人森を再生する会 会長 神谷輝幸

本年度から始まったあいち森と緑づくり事業の助成金が本会に交付され、秋の森林観察会と森づくり講演会の2つの事業を行ったところ大変好評のうちに終わることができ感謝申し上げます。2つの事業の概要を紹介いたします。

## 秋の森林観察会



11月8日(土)、午前中は、マイクロバス4台を連ねて、これまで植林してきました設楽町の「水源の森」へと向かいました。案内人は横浜国立大学藤原一繪研究卒業の吉野知明さん。事前に樹木調査した資料を準備してくださり、私たちの身長以上の成長したミズキなどの樹木を見て回りわかりやすい説明に納得。自分たちが植えた木を見なが

ら感慨深げでした。

紅葉が水面に映る段戸湖のほとりで昼食をとり、段戸裏谷原生林へと向かいました。案内人は地元の観光ガイド加藤博俊さん。飾らない人柄が親しみやすく、やさしく丁寧に時々ユーモアを交えながら生態系息づく段戸裏谷原生林を案内してくださいました。加藤さん自身山の保全への情熱から私財で山を購入し、子供たちが山に親しむようにイベントを行っておられるとの話に只者ではない人であることを印象付けられました。



## 森づくり講演会

11月28日(土)、多忙な日程を割いて、日本熊森協会会長の森山まり子さんの講演が実現しました。参加者は88人でしたが、「こんないい話が聞けるならもっと多くの人に知らせるとよかった」という声が多数寄せられました。そ



の証拠に、講演が終わってから、何人かの人が森山まり子さんの講演要旨を記録した「クマともりとひと」という小冊子を30冊、40冊とまとめ買いし、知り合いに配っておられました。

講演中森山さんは、これまでのドラマを涙ながらに話をされ、聴く人の心を揺さぶりました。森山さんは中学校の理科の先生でしたが生徒たちに突き動かされ、今の運動を教職を途中でなげうって始められました。

講演会后森山先生を囲んで茶話会を行うこともでき思い出に残るひと時を過ごすことができました。講演会では聞けないエピソードを披露していただき、大変参考になりました。

### 今後の活動の方向性-奥山保全トラス-



日本熊森協会のすごいところは、800メートル以上の奥山を熊たちの棲

める自然の森として保全するために、資金を集め奥山を買うという運動を起こし、これまでに1244ヘクタールの山を買収し、トラス地としたことです。その行動力には敬服の至りです。私たちNPO森を再生する会も山を買う運動を設立当初からめざし、資金を集めてきました。これまで集まった資金でとりあえず山を買収しようと候補地を探し始めていた矢先、日本熊森協会が力強く同じ運動をすでに始めていたのです。私たちも日本熊森協会と手を取り合い、日本を動かしていこうと同じ想いの2つの会が出会った瞬間でもありました。

なお、奥山保全トラス(8頁参照)の詳しい記事はTHE ISSUE110号に特集記事として紹介されています。残部が少しありますので希望者はお分けいたします。(1冊300円 この雑誌は路上生活者の自立支援のために発行されているものです。)

以上のように、2つの事業を通して多くのことを学ぶことができました。この機会を与えていただいたあいち森と緑づくり事業に心から感謝し、報告といたします。



## 平成 21 年秋の観察会によせて

平成 21 年 11 月 11 日

エスペックミック株式会社 吉野知明

NPO 森を再生する会の平成 16 年春植栽地の正面に、横浜国立大学名誉教授の宮脇昭先生書の「緑のダム」と描かれた石が据え置かれている。この会の活動の根幹はこの「緑のダム」という言葉に集約されるように思う。

山に樹木が茂り、豊かな土壌が形成され、その土壌が雨水を蓄える。これが、「緑のダム」の本質である。奥山まで植えられたスギやヒノキの人工林も緑ではないかという話もあると思うが、重要なのは、水を蓄えられるだけの豊かな森、豊かな森林土壌があるかどうかである。適切に管理された人工林では下草も豊かに生え、緑のダムとして機能している場所もあるだろう。しかし、急峻な山奥に植えられたスギやヒノキの人工林は、材価が低迷し、林業の担い手が徐々に高齢化するなかで、一体どれくらいの手入れが出来るだろうか。



私自身、平成 18 年来、NPO 森を再生する会の植樹祭にお世話になっているが、そのときに見た人工林の様子は、今も印象に

残っている。下枝は枯れ上がり、林内には草も灌木も生えず、落ち葉や腐植に富んだ水を保水するはずも森林土壌もほとんどない状態であった。

この人工林を切り開き、設楽町田峯に適した樹種を植生調査に基づいて選定し、流域市民の手で幼苗を植える活動が平成 16 年より、この地で継続して行われている。急峻な山での森林整備作業は決して楽ではなく、地道に継続していくのは非常にエネルギーのいるものである。その森林整備作業や植樹祭が 6 年間継続できるということは、この会の持っている問題意識の高さ、強さ故なのだと思う。



平成 16 年の第 1 回目の植樹から平成 21 年春の植樹にいたるまでの 6 年間、NPO として積み上げてきた合計 7,000 本を超える植樹の実績は、全国的にも貴重な事例といえる。これまでの植栽地について、植樹祭参加者の方と振り返る機会がないかと思っていたところ、神谷輝幸会長様より秋の観察会のお話をいただいた。「観察」という言葉は、ただ目に映るだけでなく、対象を注意深く見て、対象の変化を読み取るという意味をもっている。この観察会では、多少欲張りかもしれないが、苗木の成長、植栽地で見られる植物、動物の痕跡、植栽年度の異なる植栽地の状況など森が形成されていく過程も「観察」できればと思い、観察会の事前資料を準備させていただいた。

観察会当日は、非常に天候に恵まれ、絶好の観察会日和であった。限られた時間内であったが、いくつかの植栽地を巡ることができた。



平成 21 年の春に植えた場所は苗木が良好に活着している様子が観察できるとともに、植えつけた表土がまだまだ見える状態であった。それとは対照的に平成 18 年に植栽した場所は植栽した樹木が枝葉を茂らせ、周辺から種子が飛来して芽生えたシロモジやコアジサイといった樹木や草が生い茂り、表土が見えない状態になっていた。このように植栽後 3 年が経過するころには、多少の雨では表土や落葉が流れ落ちることなくなり、表土上に堆積した植物の枝や葉を土壌微生物が分解することで、森林土壌が育まれ始めているといえる。平成 16 年植栽地では、植栽したブナ、ミズナラ、ミズキ、ホオノキ、トチノキなどが良好に成育し、ミズキなどは人が見上げる高さまでに成長していた。また、空いたスペースにはシロモジやタラノキなどが混生し、植栽した苗木とその土地の植物が混生した小さな森ができ始めている状況を観察することができた。植樹に立ち会った方が、感慨深げに植栽木を見ておられたのが印象的であった。



午後には段戸裏谷原生林の観察会では、地元、設楽町田峯の加藤氏の巧みな案内に聞き入りながら、散策を楽しむことが出来た。今回の観察会には、100 名を超える方が参加された。さわやかな日差しの中、植栽地での植栽木の成長や樹林の形成状況、段戸裏谷の美しい紅葉、鳥の声、森の中にあるさまざまな音、形状、色彩に関して驚きや発見や感動があったと思う。この観察会が森林の再生や源流域の生態系に関して親しみをもち、更なる森づくり活動へつながればと思う。

# 百年の森づくり

観光ガイド 加藤博俊

## はじめに



私は町役場から頼まれて、奥三河でふるさとガイドをやっているせいもあり、近頃地元の小中学校を訪ねる機会が多くなりました。そんなある日、総合学習で中学生と地域のことについて色々な話しをしていました。話はずむ中で私は、「奥三河で自慢になるもの」について生徒達に聞いたところ、すかさず、「きれいな水、きれいな空気そして大空」と答えが返ってきました。正直、とてもうれしかったです。私たち大人は、とかく人間が作った物を選ぶところですが、子ども達は身近な自然を感じていたようです。

そんなきれいな水や空気は、この奥三河の森からの恵だと私は思います。そんなことから私の案内するエリアは、奥三河の山や森が多くなるのが当然かと思えます。

その森の中でも私をひきつけてならないものがあります。見れば見るほど味が出てくるのです。それは私が大好きになってしまったブナの木なんです。

## 日本のブナについて

ブナの木というと、日本には北海道南部から吸収の山岳地帯に意外と多くのブナ林が残っているようですが、昔に比べると人の手によって激減したそうです。

この奥三河にも標高600メートル位の山には、多くのブナ林が見られたそうです。その証拠にスギやヒノキの林の中に時々ブナの株を見かけることが出来ます。

現在の日本のブナ林は、大きく分けると三つのグループに分かれていると言われます。一番大きなグループは北海道から鳥取県まで分布する日本海側のブナ林。二つ目は、関東と紀伊半島に分布する太平洋側のブナ林、三つ目は中国、四国、九州分布する西日本側のブナ林さらに、DNAの分析をすると13のタイプに分かれるそうです。

このようにブナを研究する人は、けっこう大勢いて話を聞くと色々な分析結果を教えてください。中でも今注目されているのは、奥三河のブナ林は太平洋側にあるのですが、DNAの分析をすると日本海側のブナに近いと聴きました。そこで面白いのは、太平洋側のブナ林を関東と紀伊半島日本海側のブナ林が分断をしている点です。残念ながら私が聴いたのは、このあたりまでで、それ以上はただ今調査・研究中であるとの事です。

## 奥三河のブナについて

そこで私も奥三河のブナがどのくらいあるのか調べて見ることにしました。約1年半位かけて調べたところ、奥三河の南限は鞍掛山と竜頭山にわずかに残っていました。ここから標高700メートル以上の山頂付近にわずかに点在するのみで非常に少ないことが解ります。

ブナの林が形成されているのは、大きく分けて南から段戸裏山原生林・基盤石山・面ノ木原生林・大沼原生林・茶臼山が上げられます。その中でも段戸裏山原生林と面ノ木原生林には幹周り3メートル～4メートルの大木が多く残っていました。このようなブナの森は東北地方まで行かなければなかなか見られないブナの森です。

しかし、残念なことにこのブナの森には寿命がきているようです。それに温暖化が追撃ちをかけ分布の標高をあげている為に次の世代の木が少ないようです。このことについてブナの林が奥三河から無くなってしまふ、または無くならないで自然に世代交代をすると両論されているところですが、もしなくなってしまうは大変と思い、私たちの手でブナの森を作ってみることにしました。

## ブナの種の採集

手はじめに遺伝子汚染を避けるため、地元のブナの木から種を採集し苗木づくりを始めたのですが、なにぶん素人のやることであるために失敗の連続となり、5年間に20本ほどの苗しか作ることが出来ませんでした。しかしこの5年間で経験したことも数多くあり、今ではようやく苗木づくりの要領をつかんできたところです。



## 種拾いのできごと

奥三河のブナは5年から6年の周期で、実の成り年があるらしく、種は毎年取れるわけではありません。平成11年ブナの成り年となりブナの種が沢山手に入りました。ブナの種の収穫時期は10月中旬から11月中旬に行われます。それは、この時期に落果する種は一番発芽率が良いため、集中的に採集をしてゆきます。ブナの実には茶褐色をした三角錐をした形で、ちょうどソバのみを少し大きくしたような形をしており、そのまま食べてもすごく美味しい実です。森の木の実の中では一番美味しいといわれるのがブナの実であるために、森に住む動物達が最初に食べるのがブナの実です。動物たちは、ブナの実がなくなると他の木の実を食べてゆきます。そんなきびしい生存競争の中で種を拾っていると、私の少し前でカサッ、カサッと音がします。フッと顔を上げると私の前にネズミがいました。お互い目と目が合っしまい、わずかに空白のときが感じられました。その瞬間ネズミは、やぶの中に消えてしまいました。お互いに真剣に種を探していたことが分かります。やがて暗くなってきたので、続きは明日にすることにして、この日は帰ることにしました。次の朝、ここに来てみるとそこには一粒の種も残っていませんでした。

## 植林する山について

さてブナの苗を植林する場所は、標高800mから1000mの山が良いわけですが、これが偶然なものかわかりませんが何年か前に3.5ヘクタールの山が私の手に入っていたのです。この山は、もともと段戸山の一部であったのですが戦後の開拓で民地として払い下げられた山です。開拓当時は、もともとブナの林であったとのことですが皆伐をしてからは、一本のブナも生えてこなかったそうです。私たちは、この山に人知れずブナの林を作る準備をしていたのですが、ブナの森を育てるのには百年はかかります。しかし私の寿命はあと20年か30年位なのです。とても時間が足りません。「まあできるだけ事をやってみるか」と思っていました。私が時々小学校でこの話しをすると先生や子どもたちは、とても興味深く聞いてくれまして、自分達も手伝うことが出来ないかと言ってくれました。それから話しはどんどん進んでゆき、やがて親子で参加してくれることになってきたのです。子どもたちは、百年後の子どもたちにブナの森をプレゼントするのだと計画を立て、平成16年の5月に第一回目の植樹をすることになりました。

## 原生林の冬

今では森の中に簡単に入っていくことができます。しかし、地元の人を話すと40年前までは、雪が腰のあたりまで積もり、山の中へ入ることは出来なかったそうです。雪が少なくなった原因は温暖化の影響が大きく現れてきた結果であり、これにともない色々な昆虫の移動も多く見られます。

雪の減少は、ブナの種の発芽にも大きくかわりがあり、12月に雪が少なくなったのも種の減少につながっています。12月に落下した種は、雪が多ければ動物達に食べられる確率が低くなるために、残される種も多くなるわけです。

## 種の選別と苗床

植物を無農薬で種から育てるということは、良いことから悪いことまで色々な経験をさせてくれます。皆さんも一度やってみてはいかがでしょうか。

少し参考になるかもしれませんが、ブナの苗木作りの経験談を話します。まず、採集した種を水の中に入れ1時間ほどすると、シイナと虫食いの種が浮きますので、水に沈んだ種を慎重に取り出し良い種を選別してゆきます。個人差はありますが、この時点で採取した種は半分くらいになります。

選別された種を小分けにして冷蔵庫に保管をし、種がある程度集まった時点で種まきをします。蒔時は12月がよいでしょう。

次に苗床を作ります。10cmほど床上げをして平面にした後、5センチ間隔ぐらいに種を並べてゆきます。並べ終わったら、3mm程の網目のザルで土をふるいにかけ、種の上に5センチ程土をかぶせてゆきます。かぶせ終わったら、ワラを薄くかぶせます。この時、風でワラが飛ばない工夫が必要となり、更に枯れたスギの葉を細かくしたものをワラの上に薄くかけて一通り出来上がりです。

## 発芽からコオロギの食害

4月に入ってから、ワラだけを取り除き乾燥させない程度に水やりをします。この時、直射日光が当たらないように50cm程、上に網をかぶせます。1・2週間すると種が殻を付けたまま、芽を出してきます。その後は、ハート形をした二葉が元気よく現れ、それから1週間ほどで本葉が二枚つき、ブナの苗が出来ていきます。

ここからが、一番大変なところで、さまざまな障害が出てきます。少し目を放しただけですぐに虫に食われてしまいます。ミズナラやコナラと一緒に育てていても、何故かブナだけが食べられてしまいます。中でも一番驚いたのは、本葉を出した苗が根元あたりからかじられ、バタバタと倒れ枯れてゆくのです。

はじめは、ネズミがかじるのかと思いネズミ捕りを仕掛けてみましたが掛かりません。今度は粘着性のゴキブリホイホイを仕掛けてみたところ、かわそうにコオロギばかり掛かるのです。蒸し暑い夜に涼しい声で鳴いてくれるので大変申し訳ない気持ちでいたのですが、依然とネズミは掛かりません。ある日苗床の草取りをしている時に、二人のお百姓のおばさんが通りかかり、「兄さん何やっとなだん。」と声をかけてくれました。私は・・・と訳を話すと「兄さん、そりゃネズミじゃないぞん、そこにいるエンマコウロギがかじるだに。」私はまさかこんな堅い木をコオロギがかじるなんてと思い、にわかに信じられませんでした。その場でエンマコウロギをつかんでみると、私の指に噛み付きました。「いたッ」「なるほど」と自分の思量の狭さと経験不足が恥ずかしくなっていました。その後、おばさんたちに御礼を言ってコオロギを退治してゆきました。その内に、またまた私の頭の中では疑問が沸いてきました。

## ユウカリについて

私は、いろいろな所で環境について話しをするのですが、その中にオーストラリアのタスマニア島のことがあります。その島では、日本を含む先進国がユウカリの原生林を大量に切って持ち出した後、自然回復ということで苗木を植樹します。すると、今まで原生林で暮らしていた動物や昆虫がその苗木を食べるそうです。すると、これを害獣・害虫として殺してしまうそうです。何か変ですね。

私にやっていることも、規模は小さいけれども共通点は多いようです。一度失われた自然を回復するのがいかに難しいか、また大きな犠牲をとまうかを実感させられました。



## 子供たちの植林

色々なこともありましたが、何とか苗木も少しずつ出来てゆき、平成 16 年 5 月 9 日(日曜日)子供たちによる第一回目の植樹が計画されました。

小学校のグラウンドに集合をして、車に乗り合わせて植林地に行く予定でした。しかし、その記念すべき当日、朝から雨になってしまいました。

グラウンドにたらずんだ私は、奥歯を噛んで天を仰ぎ「みんな来ないかも知れんな」と少し恨めしく思って半ばあきらめていたその時、カッパを着た子供たちがチラホラ、そして傘を差したお父さん、お母さんがチラホラ、私に暗い表情が消えないうちにアッと言う間に 40 人が集まって来ました。驚いたことに、その一人一人が笑顔でした。私は「ハッ」として、自分が少々恥ずかしくなり、「失いたくないもの、それは希望と感動だ」またまた反省をしてしまいました。

早速、一同車に乗り合わせ山に向かいますが、雨は依然と降り続けています。やがて植林地の山に着いて見ると、ここは標高 850m あり少々寒いのですが、山は鮮やかな新緑で私たちを迎えてくれたのです。

全員で苗木と道具を持ち山に入り植林地に着いた頃、ほとんど雨は上がっていました。今回の植樹はブナ・ミズナラ・カエデ・アセビの 4 種類、すべてこの近くの山から実を採集して 4 年間育てた苗木です。高木・中木・低木を配してうまく混生をさせ、太平洋型ブナ林を再生してゆきます。

ブナの木を植えるのは 6 年生、1 年生から 5 年生の子供たちはブナ以外の木を植えます。お父さんお母さんの手伝いもあって、手際よく作業が進み、すべて苗木が植えられた頃、再び雨が降り出してきました。天候がよければ、ここで手作りのお昼ご飯となるのですが、本日は早々帰ることになりました。

## 手渡されるブナ

植えられた木が森となるには何年かかるのか、とても気の長いことのようにですが、「木の成長を見に来ることが楽しみだ」と子どもたちは言ってくれました。

今年植えられたブナは 3 本だけですが、来年は 15 本の苗木が植えられます。その次の年は 200 本の苗木を植えることができます。

こうして植えられたブナの木は、子ども達が所有者となり、やがて大きくなったブナの木は子どもたちの子供へと手渡されるのです。

## 子供たちからの手紙

やがて植林をした春も過ぎ、新緑の夏へと変わってきたそんなある日、一通の作文が私の所に届きました。その作文には、植えられたブナの木は「心」と名づけられていました。そんな子供の純粋な気持ちには驚かされてしまいます。

## おわりに

今、外国ではすごい勢いで森林が切られていること、すごい勢いで砂漠が広がっていることが日本の中には、なかなか伝わって来ないようです。

日々の生活に追われ、自分にかかわりがないと、気がつかないでいることが多すぎるようです。

「人間が人間らしく生きるためには、自然の教える道をたどれ」これは、私の植物の先生が言ってくれた言葉です。

子供たちによい環境を残すのは、私たち大人の役目だと、いつも思っています。



## 奇跡の干潟・六条潟 ~三河湾 アサリ育(はぐく)む里海~

### 放送内容のあらまし

1月29日(金)NHK「金とく」という番組で、見出しのタイトルの放送がありました。放送内容はざっと次のようなものでした。

アサリの生産日本一の愛知県。それを支えているのが、愛知県三河湾で“奇跡の干潟”と呼ばれる干潟「六条潟」。水が温む春にアサリは産卵、稚貝が一気に増え、夏にはカニたちの楽園に。そして秋が深まると渡り鳥たちが飛来します。干潟の豊かな生態系を育くむのは三河湾にそそぐ豊川。さらにその源流をたどると、生い茂った森が姿を現します。森の土壌のフィルターをとおって染み出る水には栄養分がたっぷり。アサリの湧く干潟は、森、川、海につながりがあって初めて生まれているのです。

今回は、アサリの神秘の産卵の様子を特殊撮影でとらえ、六条潟に集まる様々な生き物に迫るとともに、それを支える川や森との奇跡的なつながりにも目を向けていました。自然のダイナミズムをたっぷり感じさせてくれる放送内容でした。

### 森は海の恋人

気仙沼の牡蠣漁師畠山重篤さんが植樹祭のときに講演してくれた、「森が海の中にもうひとつの森を育て生き物のゆりかご・楽園になる」という話を、三河湾で証明してくれた放送内容でした。NPO森を再生する会が10年間にわたって一筋の川の流域住民で広葉樹の植樹をしてきたことはとても意義のあることだと思つづくと思います。しかも受精したアサリの卵が三河湾内の海流に乗り、六条潟へたどり着き、稚貝として大量に育ち、その稚貝を愛知県の漁師が採りに来てそれぞれの漁場に撒く。こうして三河湾はアサリ漁獲量日本一に。関係ないと思っていた豊川水系が見事に三河湾全域とつながっていたのです。

### 設楽ダムは生態系を壊す

そこで心配されることは、建設計画中の設楽ダムができれば、この豊かな生き物を育む六条潟の生態系は、破壊されていくことは目に見えています。COP10が開催される愛知県は率先してCOP10開会式でダムを中止する宣言をして欲しいものです。お金の魔力は恐ろしいもので、最初反対していた住民も多額の補償費を提示され同意しています。同じお金を使うなら山の再生と林業を復活させる方が未来の世代の人たちにも大切なことであり、その施策を創造することは可能であり、山の住民にとってもそのほうが夢と希望があります。地元民だけでなく、流域住民みんなまで考えて行きたいものです。(文責:神谷輝幸)

### 今、なぜ「奥山保全トラスト」か？

かつて日本の奥地には、多種多様な生物にあふれる鬱蒼とした森が広がっていました。そして、この森から湧き出る滋養豊かな水は、あらゆる生き物の生命を育み、農業、林業、漁業、工業、全ての産業を支えてきました。

しかし、私たちの祖先が「奥山」として大切に守ってきたその森は、戦後数十年の間に、開発やスギ・ヒノキの拡大造林のためにその多くが破壊されました。このため、様々な野生動植物が絶滅の危機に瀕し、また、生物の多様性を失った日本の「奥山」は、林業不況による放置人工林の増加や地球温暖化の影響も重なり、荒廃の一途をたどっています。

かつて地球上に誕生した文明はすべて鬱蒼とした森の中で生まれ、森と共に栄え、そして、文明の基盤である森を失って滅びていきました。今、わずかに残る奥地の自然林を保全し、広範囲にわたり荒廃した森の再生に早急に取り組まなければ、近い将来日本はかつて滅びた文明と同じ道をたどることになると、私たちは危機感を募らせています。

およそ10年にわたる森を再生する活動を続ける中で、ナショナル・トラストにより森林を買い



取り、永久に開発できないように保全・復元することが、豊かな森を残すために必要であるという思いを強く持つようになりました。

具体的には、およそ標高800メートルを境に人間と動物たちの棲み分けをし、標高800メートル以上の「奥山」を人間が立ち入ることを禁じるナショナル・トラスト活動を展開し、種の多様性の保たれた豊かな自然を守り、真に人が自然と共存できる社会を実現することをめざして、私たちNPO森を再生する会は「奥山保全トラスト」を設立したいと考えます。(文責:神谷輝幸)

## 葉っぱの不思議 田中修(甲南大学教授)著から

私たちは呼吸を止めると、数分後には死にます。葉っぱは人間の呼吸に必要な酸素を作り出してくれていることは分かっているのに、落葉が邪魔だとか、見通しが悪いからという理由で街路樹や庭の木を容赦なく切っています。木から言えば感謝してもらえて当然なのに、人は木を憎んでさえいます。田中修先生の話聞いて、葉っぱのことをもっと理解しましょう。

### 葉っぱは夜の長さを正確に測る

:秋に桜の花が咲いた例がありますが、なぜですか。

田中:神戸で秋に桜の花が咲いたことがありますが、夏に台風が来て潮風で葉っぱが枯れ落ちたのが原因です。葉っぱは、夜の長さを測り、夏にできた花芽に冬が来ることを伝えます。すると花芽は寒い冬の寒さに耐えるように、芽を固いつぼみ(越冬芽)にします。秋と春の温度は同じなので、越冬芽にしないと春を待たずに秋に花が咲いてしまうのです。

同様に、毛虫に桜の葉っぱを全部食べれると秋に開花することもあります。

:花を咲かせるのは葉っぱから離れた「芽」ですよ。すると、葉っぱから「芽」に「つぼみをつけなさい」といった信号でも送っているのですか。

田中:その通りです。葉っぱから作られる「フロリゲン」という物質が、「夜の長さの変化を感じた」という信号を芽に伝えているんです。電照菊は夜、葉っぱに光を当てることにより、花の咲く時期を調節して栽培しているのです。

### 葉っぱはブドウ糖やデンプンをつくる合成工場

:葉っぱは、ほかにどんな仕事を？

田中:葉っぱの役割で何よりも重要なのは、CO<sub>2</sub>と光と水を使って、光合成をすることでブドウ糖やデンプンをつくり、植物を成長させること。科学技術がいくら発達した今日でも、葉っぱ一枚の働きさえ、工場では出来ないのです。

### 人間が呼吸できるのは葉っぱのおかげ

田中:さらに重要な働きは、葉っぱが光合成をするとき、人間の呼吸に必要な酸素をつくってくれることです。人間は、呼吸を止めれば数分で死んでしまいます。

私たち動物は元を正せば植物を食べて生き、呼吸しているわけで、植物は生命の源と呼んでいい存在です。葉っぱは地球生命の主演です。

### 葉っぱは地球温暖化対策にも

田中:さらに、地球温暖化対策としても葉っぱが活躍するのは、ご存知の通りです。

葉っぱは夏の暑さから自分を守るために、葉っぱから水分を蒸発させ、冷やしています。しかし、多くの人々は、緑化することの「価値」は理解していると思うのですが、緑化することによって得られる「喜び」を知らない。日々、植物と接していると、成長を見る喜びや、新しい発見の喜びがあります。「一生幸せでいたかったら『庭師』になれ」、なんて諺もある程です。(文責:神谷輝幸)

## 森を再生する会の活動記録

(2009年9月～12月)

9月27日(日)	間伐(作手)	11月3日(日)	観察道草刈
10月7日(金)	拡大役員会	11月8日(土)	秋の森林観察会
10月17日(日)	観察会事前調査(西川地区 水源森)	11月28日(土)	森山まり子氏講演会
10月18日(日)	観察会事前調査(段戸裏谷 原生林)	11月29日(日)	間伐(作手)
10月25日(日)	間伐(作手)		

### ナショナル・トラスト とは

ナショナル・トラスト運動とは、開発や荒廃の恐れのある貴重な自然環境や歴史的遺産を維持・管理するために、一般の市民や企業から寄付金を募り、集めたお金で土地や建造物を買収することで保護する活動です。

誰もが手軽に環境保全活動に参加することができるという点で特徴があります。本来であれば、国や自治体などが行うべき活動ではありますが、国などの手が回らない、より身近な自然を守る手法として注目されています。

ナショナル・トラストは約100年前にイギリスで始まり、国民のために、国民自身の手で大切な自然環境という資産を寄付や買い取りなどで入手し、守っていく活動として始まりました。その後、身近な自然を守るための手法として注目され、イギリス国内で急速に広まりました。

### お 知 ら せ -

#### 寄付の件

下記の方々から寄付を頂戴いたしましたので、報告いたします。(振り込み順)

遠山松枝様(12万円) 神谷守様(3千円) 丸山光夫様(5万円) 神谷俊治様(1万円)

まのあけみ様(3千円) 大谷宮子様(10万円) 豊安工業様(26,690円)

有難うございました。改めてここに感謝申し上げます。

#### 春の植樹祭実施の件

2010年5月23日に作手実施する予定です。

詳細は後日案内いたしますのでよろしくお願いいたします。

#### 小谷野綿子様からのお手紙の件

前略 ごめんなさい。このたび、下記の私の拙い歌が「平成万葉集」の今様の部に収められました。日ごろのご指導に感謝しつつ、謹呈申し上げます。

#### 水を生むやまになれよと植樹する2百4本のカシ、ナラ、サクラ

小谷野綿子(74歳) 千葉県

平成20年の春の歌です。段戸山で行われた植樹祭に夫婦で参加し、杉林を切り開いた斜面に広葉樹を植えました。木の育つのが楽しみです。三河の山は私たちの故里です。

かしこ

平成21年10月吉日